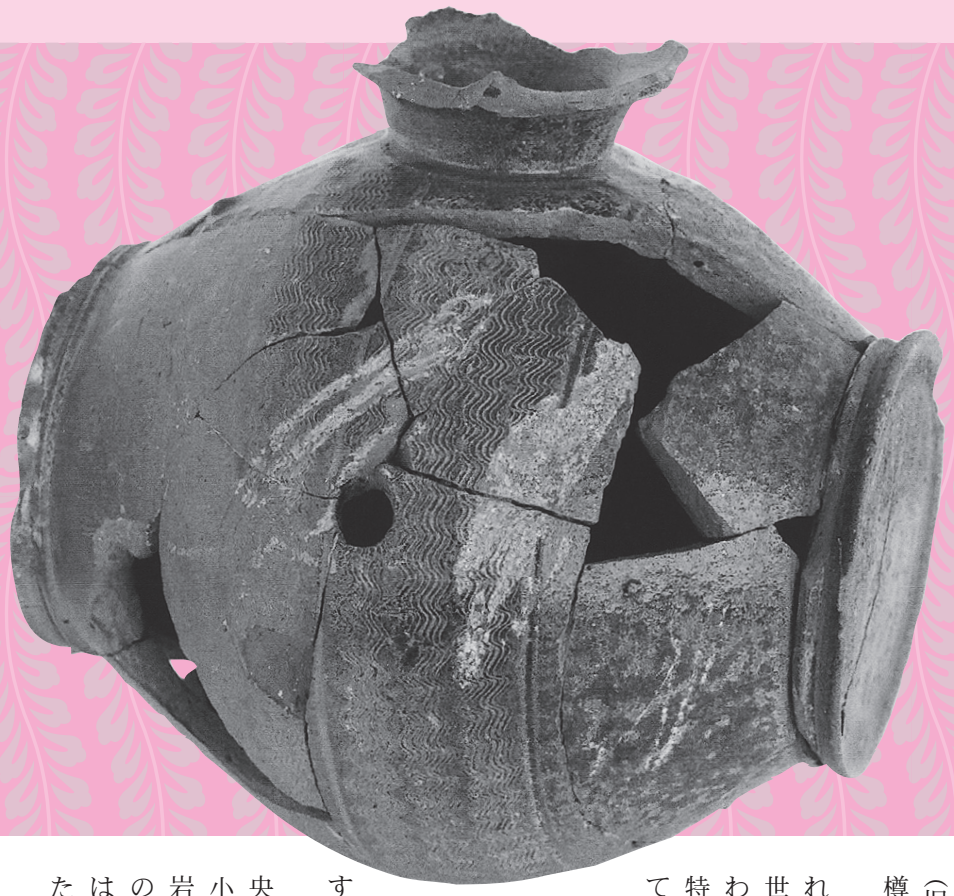
つちうら発

未来への伝承 ㊿

樽形瓹

―不思議な形の容器―



写真の不思議な形をしたものは「樽形瓹（たるがたはそう）」と呼ばれる須恵（すえき）器の容器です。田宮地区の梶の宮神社周辺に所在する田宮高岡遺跡（旧梶の宮遺跡）で発見されました。今回は樽形瓹について紹介します。

この樽形瓹は須恵器という焼き物で作られています。須恵器は古墳時代の中頃、４世紀末から５世紀前半頃に朝鮮半島から伝わりました。轆轤（ろくろ）の使用と窖窯（あながま）での焼成が特徴で、色は灰色が多く、硬く焼き締まっています。

瓹とは、液体を入れる胴部に１～１・５㎝程度の丸い孔をあけ、竹など筒状の用具を差し込み、そこから液体を注ぐ容器です。小型の壺に多く見られ、５世紀から６世紀代に作られました。須恵器の製品がほとんどですが、素焼きの土器である土師（はじ）器の瓹もまれに見られます。

樽形瓹は樽を横に倒した形で、上部の中央に口を付け、胴部に孔をあけています。小型の壺の瓹は烏山遺跡、内出後（うちでうしろ）遺跡（小岩田西）、一丁田台（いっちょうだだい）遺跡（木田余）など市内の遺跡からも発見されていますが、樽形瓹は県内でも発見例は極めて少なく、本例はたいへん貴重な資料です。

田宮高岡遺跡から発見された樽形瓹は、ビア樽のような形をしています。大きさは横の長さ19㎝、胴部の最大径17㎝、高さは口縁の先端部分を欠きますが、おそらく20㎝程度と思われます。写真の左側を底にして樽の形を作り、もう一方をふさいでいます。中央には７本櫛歯による波状（はじょう）の文様を５条施し、胴部のほぼ中心に径１・５㎝の孔があけられています。自然釉（ゆう）の掛かり具合から、左側を下にして焼成したことが分かります。

樽形瓹は、須恵器が生産され始めた頃の５世紀代に作られました。本例は県内でも古い須恵器のひとつですが、この頃の須恵器の窯跡は県内では発見されていません。当時の生産地は大阪府や愛知県など一部の地域に限られていました。おそらくこれらの地域から運び込まれたと思われます。

生産量が少ないため、この頃の須恵器は貴重品でした。そのなかでも稀少品である樽形瓹が出土したことは、この地に力のある人が住んでいたと考えられます。梶の宮神社周辺は、桜川低地を臨む台地上であることから交通の要所であり、豊富な水資源を活かした生産力の高い地域であったと思われます。そのため長く集落が営まれ、力のある人が誕生したのでしょう。

今回紹介した樽形瓹は考古資料館で展示していますので、ぜひご覧ください。

問 考古資料館（☎826・7111）

発行　土浦市　〒300-8686　土浦市下高津一丁目20番35号　☎029-826-1111
http://www.city.tsuchiura.ibaraki.jp/　E-mail:info@city.tsuchiura.ibaraki.jp
編集　市長公室広報広聴課　再生紙を使用しています　PRINTED WITH SOY INK 環境に優しい大豆インキを使用しています
次回「広報つちうら」２月中旬号は、２月15日（木）発行予定です

人口と世帯数（平成19年１月１日現在）　14万3764人（男７万1547人　女７万2217人）５万4316世帯